

「勝沼らしさ」の源泉

— 文化的景観の価値と受け継ぎ方・活かし方

菊地 淑人

山梨大学大学院総合研究部生命環境学域

1. 日本を代表するブドウ産地・ワイン醸造地の誇りに溢れた地域

土地の使い方とその背後にある地域の営み（生活・生業）という観点から勝沼地域を捉え直す調査を、甲州市教育委員会文化財課と県内外の諸大学（山梨大学、山梨県立大学、工学院大学）が連携して平成 28 年度から始めた（注 1）。

山梨大学では、土地の使い方の今と昔、さらには景観と結びついた生活や生業の遷り変りの一端を把握するため、教員・学生がさまざまな観点で、畦道を含めて、地域を隈なく歩き、調査を重ねてきた。盆地の内陸性気候で夏は暑く、また時に風が強く吹き込むという勝沼地域の気候的な特徴を反映し、また昨今の気象条件の中では夏の夕方は往々にしてゲリラ豪雨に見舞われ、「雨ニモマケズ風ニモマケズ雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ」（注 2）といった宮沢賢治の言葉を体現したような調査であった。

そうした調査において、調査内容とは直接関係ないものの、調査チームはブドウ・ワインの歴史文化に結びつく勝沼地域の姿を目の当たりにすることになる。例えば、マンホールなどにはブドウが刻印されたものは当たり前、土屋龍憲・高野正誠のシルエットが刻印されたものまである。このシルエットを見て、おそらく地元ではすぐに 2 人の名前が浮かぶのであろうが、おそらく勝沼地域の関係者以外でこれが誰だかすぐにわかる人はよほどの勝沼マニアであろう。しかし、こうしたマンホールなどの存在に加えて、その後の取り組みを重ねる中では、調査チームはさらに衝撃を受けることとなる。なんと、祝小学校、勝沼小学校などの 3 年生の中にもこれが誰だかすぐに回答できる児童がいるのである。これこそ、小さい頃から擦り込まれた文化なのではないかと感じざるを得ない。

調査と関係するのかわからないかわからない話だが、こうして、我々は、他の地域にないブドウ・ワインとディープに結びついた勝沼のモノやコトを発見するたびに、「またか！」と喜びと地域に対する尊敬が入り混じった感覚を抱くことになった。

その後の話だが、研究室学生が卒業論文の一部として、小学校の社会科の授業で使う副読本の内容について、山梨県内の市町村刊行のものを対象に分析した。その結果、市町村の平成の大合併で、旧町村レベルの地域に関する教育が薄くなったことは県内に共通するが、それ以上に重要なこととして、合併前の町村レベルでも扱われている内容にはムラがあることが指摘された。甲州市の場合でも、旧塩山市、旧大和村の副読本は地域を題材にしながらも内容は地域の産業など極めて一般的であった（県内の他市町村と共通する）。他方で、旧勝沼町は、ブドウ栽培の歴史、現在の生業なども含め、かなり深めであるという。そして、こうした扱いは、大合併が進んだ北杜市の旧町村などと比較しても、極め

て特殊だという（注3）。

こうしてみると、ブドウ栽培・ワイン醸造に根ざした地域のアイデンティティは学校教育も含めて継続的に形成されてきたものであり、そうした誇りがビジュアル・アイデンティティとして土屋龍憲・高野正誠2人のシルエットの作成（1989）に繋がり、現在もそれがさまざまな箇所に使われている。調べれば調べるほど、勝沼地域は他の地域にはない特色をもっているのである。

歴史資源やそれに根ざしたストーリーは場所に固有のものであり、他の地域にないその土地ならではの魅力である。勝沼はそれをすでに顕在化させており、地域の中では当たり前のように共有されている。それをどのように言語化して域外に発信できるか、あるいは景観や農業、地域プロモーションなどの施策に反映させられるかといった視点が、より深く地域の文化を活かし、将来にわたって育んでいくためには不可欠である。こうしたことは、観光地形成といった観点からも国内外で着目されており、今後の勝沼地域の観光地形成にも意義のあることであろう。

2. 「勝沼らしさ」を体系的に整理する

目の前に広がる勝沼地域の景観は、この地域にしかないものである。それは、勝沼地域における歴史、別の言葉でいえば生活・生業の積み重ねによって育まれてきたものである。それを失うことは勝沼地域の骨格を失うようなものであろう。したがって、こうした目の前に広がる景観とそれを形成してきた自然・歴史・文化の関係性は、勝沼地域のアイデンティティの凝縮であり、「勝沼らしさ」の源泉ともいえる。その関係性は地域では当たり前のように捉えられていることに過ぎないのかもしれないが、改めて体系的に読み解くことは、今後の地域の進む道を考えるうえで重要である。

勝沼地域のブドウ栽培、ワイン醸造の発展を考えるうえで、甲府盆地の東の玄関口という立地的な優位性が果たした役割は大きい。こうした立地にあって、近世には甲州街道、さらに近代には鉄道（中央本線）開通、さらに戦後には新笹子トンネルや勝沼バイパス、中央自動車道開通など、流通往来を支えるインフラ整備が地域の生活・生業の発展に大きな影響を及ぼしてきた。ブドウ・ワインの出荷もしかり、モータリゼーションの流れの中で戦後に多くの観光客がブドウを目当てに押し寄せ、「露地のブドウ園」にはじまる観光ブドウ園の広がりもしかり・・・。

そして、扇状地という特殊な環境で営まれてきた暮らしも勝沼地域の景観形成に大きな影響を与えてきた。例えば、近世には、土地の高低差を利用して、セギなどを張り巡らせ、セギが密に張り巡らされた場所には水田が多く営まれた。さらに、近代にはセギの水を利用して水車を回して糸をつくり、岩崎を中心に製糸工場が広がった。こうした時代が前提にあり、そこから、ワイン・ブドウへとシフトしていく。こうした扇状地における生活・生業の

営みの積み重ねによって、現在の景観が成り立っている。

さらに、時代の流れに応じてブドウの栽培品種などを変えてきたし、江戸から明治時代にかけての水田を中心とした時代に比べて畑の合筆なども進むなど、大きく変化してきた部分もある。他方で、ブドウ栽培・ワイン醸造とともに歩んだ近代以降の歴史は地域の大きな誇りであり、現在でも岩崎を中心に甲州種やデラウェアのブドウ栽培が盛んである。こうした歴史は、勝沼の産地としてのブランド力の源泉ともなっている。その点で、地域に受け継がれるブドウ栽培・ワイン醸造に関する歴史的遺産は、景観をかたちづくる今に生きる要素といえる。こうした地域の「誇り」こそが、勝沼地域の景観をつくり上げてきたもっとも強い原動力といえるのかもしれない。

3 「文化的景観」とは

これらは勝沼地域に暮らす方には当たり前のストーリーかもしれない。しかし、この当たり前の積み重ねが今の景観を育んできた。こうした地域に住まう人々にとっては当たり前の、人と自然（気象、地形、地質など）の関わりの中で育まれてきた景観を「文化的景観」という。例えば、棚田、段々畑、牧草地、温泉地、鉾山町などが典型的なものである。もちろん、それ以外にも、景観の解釈の仕方（読み解き方）次第で、さまざまな場所を文化的景観として捉えることができる。

文化的景観は単に見た目としての景観を示すのではない。見た目としての景観が形成された背後にある景観をかたちづくるシステムも含むものである。景観をかたちづくるシステムとは、例えば、人と自然の関わり方、人の暮らしの営み方などであり、そうした関係性の積み重ねが見た目としての景観として表れるのである。つまり、「文化的景観を守ろう」とか「文化的景観を残そう」などと言うことは簡単ではあるのだが、「言うは易くおこなうは難し」という言葉のとおり、何から手を付けるかが難しい。「国宝」とか「重要文化財」といった文化財に指定された建物であれば、例えば、その建物の姿かたち、材料などを受け継ぎ、さらにはそうした建物を生み出す技術を残すということになる。ただ、文化的景観の場合はどうか。文化的景観を守ることは、それをかたちづけてきた地域のシステム、つまり、土地との関わり方、生活や生業における習わし、あるいは年中行事など、景観の背後にある地域のスタイルを急激に変化させずに続けていくことが、文化的景観を「守る」「受け継ぐ」ということに。それは難しいことのように聞こえるかもしれないが、例えば、連続するブドウ畑の中に、突然巨大な建物（例えばショッピングセンターなど）がつけられたら、あるいは道の拡幅がおこなわれたら、地域の方にとっても「違和感」が生じるだろう。あるいは、鳥居焼がなくなってしまうたら季節感に違和感が生じるだろう。そうしたことを回避する仕掛け、違和感を地域で共有する仕掛けを「文化的景観」という中でつくっていくことが「守る」「受け継ぐ」ことに他ならない。

他方で、鳥居焼が電飾が変わってしまったらそれは違和感だろうか、時代の流れの中での

変化だろうか。これはとても難しい。例えば、時代の流れの中では仕方がないという理解もできるし、勝沼中学校の生徒による聖火リレーはどうなるのか、地域に対する愛着の醸成に影響があるのでは（ひいては人口流出に繋がるのでは）といった見方もできる。こうしたことを地域で積極的に議論し、変化を認めていく、あるいは回避していくことも、文化的景観を「守る」「育む」ための取り組みといえる。

そうした議論のためのプラットフォーム、そして考えるための価値規範のひとつが、「文化的景観」といった考え方なのである。それ故、文化的景観は、行政がルールをつくる、あるいは補助金を出せばなんとかなるものでもない。むしろ、行政、住民、事業者など、多くの人が参加し、地域を見つめ、議論し、前に進むための仕掛けをつくり上げていくことが必要であり、行政の役割はそのための種まきといえるのかもしれない。

4 文化的景観を活かし、育てるために

文化的景観という観点から勝沼地域を捉え直す調査と並行して、平成28年度から、山梨大学と甲州市教育委員会では、文化的景観の価値を共有するための、さまざまな取り組みを重ねてきた。散策イベント、『かつぬま旬報』や文化的景観パンフレット、小・中学生の自由研究向けのミニブックの発行、あるいは小学校における地域探検授業の開催、企画展の実施、小中学生向けの絵本・紙芝居の作成など多岐にわたる（注4）。

それぞれがさまざまな狙いをもってやってきたものであるが、勝沼地域における取り組みでは、特に学校教育の現場における取り組みを重視してきた。それは、勝沼地域ではすでにジベ処理実習や聖火リレーなど、他の地域には見られないさまざまな取り組みが、長年にわたっておこなわれてきていることにある。こうした取り組みの中に、文化的景観という観点が盛り込まれれば、これまで以上に、景観意識の醸成や地域に対する愛着に繋がるのではないかと考えたからである。

また、勝沼地域の文化的景観の担い手は地域だけではない。観光地であり、多くの観光客が来るからこそ、そうした層にも景観の継承に対する共感を抱いてもらい、交流人口・関係人口として勝沼地域を継続的に応援してもらう必要もある。文などでの配布もおこなった。観光客の手にも多く取られたようで1年間で印刷部数の大多数が配布された。

農村観光は価値を伝えないと単に「緑豊かな場所」「美味しい食べ物が食べられる／買える場所」で終わってしまう。実際、勝沼ぶどうの丘を訪れる観光客に対して実施した調査からはそうした傾向が読み取れ、甲州街道沿いや岩崎までは観光客が流れていないことがわかっている（注5）。

勝沼地域になぜブドウ畑・ワイナリーが多く、今の景観が育まれているのかを伝える媒体が限られている中で、それを発信することは地域づくりにも繋がる文化的景観にできることもいえる。パンフレットの作成・配布はそうしたことを実証することに繋がった。

このようなことは、今後文化的景観を進めていくうえでの種まきともいえるものである。今後はこうしたことを礎に、継続的に取り組みを重ねていく必要がある。文化的景観は、国

の文化財として選定されることが目的ではなく、その後の「ケア」がもっとも重要であるのだから。

5 おわりに

上野晴朗は、ワイン百年にあたり、そこで為すべきことを、以下のように述べている。

ワイン一〇〇年の真の記念行事というのは、一人、二人の業績や、足跡をいたずらに称えることではなく、その時代の人々の汗と苦闘を改めて見直し、今日の歴史に照合させて、一つの糧とすることではないかと思われる（注6）。

40年以上が経った現在でも、この言葉はまったく色褪せていない。むしろ、社会状況が大きく変わった現代だからこそ、言葉の発する重みはますます高まっているのかもしれない。

文化的景観は土地の履歴や生業との関係性を読み解き、そうした延長線上に地域の将来に必要なことを考え、実行することである。「ブドウがあります」「ワインがあります」を越えて、「なぜここがブドウの名産地であり、ワインの銘醸地であるのか」が地域の魅力の軸となった時、勝沼地域の景観の育み方、地域の発信方法、さらにはブドウやワインの販売戦略も、さらに豊かになっていくのではなからうか。そう考えていくと、文化的景観は文化財の事業でありながら、モノを「保存」することを越えて、豊かな地域を育むための礎であり、基幹戦略なのである。

ストーリーをもつ地域は、それを起点にさまざまな地域づくりの展開が可能である。文化的景観を「文化的景観」と名乗らずとも、おのずからそうした見方をしている地域はさまざまなポテンシャルをもった取り組みに展開している。勝沼地域においても、文化的景観をきっかけとした一連の取り組みは地域づくりの軸として据えられるものであろう。

注

(1) 調査成果の詳細は、『勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観調査報告書』（甲州市・甲州市教育委員会、2019年）を参照。

(2) 宮沢賢治「雨ニモマケズ」

(3) 岩田美耶（2020）『学校教育における地域学習の現状と課題及びその効果的手法に関する試論—地域資源継承のための方策として』令和元年度山梨大学生命環境学部地域社会システム学科卒業論文

(4) 学校教育（小・中学生向け）の取り組みについては、岩田美耶による別稿参照。

(5) 高橋瑞季（2020）『高付加価値の果樹を観光資源とした農村における観光地マネジメント手法の一考察—山梨県甲州市勝沼地域の来訪者の属性と移動手段の分析を中心に』山梨大学生命環境学部地域社会システム学科卒業論文。高橋による別稿参照。

(6) 上野晴朗（1977）『山梨のワイン発達史』勝沼町役場、p. 310